

BUỔI



**Đưa ra ý kiến chủ trương
của người nói**



問題 17 :

日本では、人気の美術展^{びじゅつてん}に行くと一番混んでいるのが、入り口の作家の略歴^{りゃくれき}とか解説ボードの前です。入場者はまずここで作家の立派な略歴や作品のすばらしさという能書き^{のうしよ}のシャワーをあびて、その通りありがたく鑑賞するのです。そんな人が次に立ち止まるのは教科書に出ている名画とかパンフレットに掲載^{けいさい}された作品の前で、見終わった後には話題の「〇〇展」を見てきましたという事実が残るだけです。これでは本当の鑑賞ではなく、単に決められた通りの観光コースを見学してきただけの旅行者と同じです。

評価^{ひょうか}の定まった作家、人気の作品というのは当然専門家が選んだものであり、その意味で価値のあるものには違いないのですが、それでは単なる追体験に過ぎません。自ら主体的に鑑賞したいならば、まず入り口の略歴とか作品の解説を見る前に作品そのものを観てまわり、自分が好きな作品があったら解説を読み、最後に略歴などをみて理解を深めるという見方をしてみてもはどうでしょうか。

問い：この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1. 美術展にある、作家の紹介や解説は役に立つもので、旅行の観光コースでただ見ていただけの絵が、より深く理解できる
2. 美術展を主体的に見るために、まず作品を観てから、好きな作品の解説を読み、略歴を読むことをすすめる
3. 美術展では、自分の感受性で気に入った作品を観るべきであり、作家の紹介や解説などは見る必要はない
4. 美術展では、入り口の解説の前は混んでいるため、先に作品を観て、次に解説を読み、略歴で理解を深めるほうが効率的である

問題 18 :

文章には音楽と同じようにリズムがあります。音楽があるテンポで演奏^{えんそう}されなければ音楽として聞こえないように、読書もしかるべきスピードで読まないと知識として脳に入ってこないのです。僕は「速読法^{そくどくほう}」という読書方法をあまり評価していません。

速読とはたとえるなら、「ベートーベンの第五シンフォニーを五分で演奏してしまおう」ということに相当します。しかし、そんなことをすればどんなに素晴らしい楽曲^{がっきょく}でも音楽として成立しません。

文学もそれと同じこと。夏目漱石の『坊ちゃん』を十分程度でパッパッと読んでしまったら、脳の中で行われる情報処理としては、浅いものにならざるを得ません。

問い：この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1. 読書と同様に、音楽は演奏が速いスピードで行われると、成立しない
2. 速読では音楽と同様にリズムが重要で、スピードが遅すぎると頭に入らない
3. 速読は、それにふさわしい音楽とともに行うのが、最も効果的である
4. 速読は、音楽の演奏を普通より短時間で終わらせることと同じで、いいと思わない

問題 19 :

図書館はどこへいこうとしてるのか。

こづかいが慢性的^{まんせいいてき}に足りなかった学生時代、ぼくは最寄りの図書館みつつを同時に利用し、週に十二冊の本を借りだしていた。そのころ読んだ本が、現在の仕事にどれだけ役立っているか、はかり知れないものがある。図書館への感謝の気もちは、今でも深いのです。

それでも図書館によるベストセラー^{こうにゆうさつすう}の購入冊数を知ったときは、あぜんとしてしまった。話題のベストセラーだけを一館で十冊近くも買いこんでいるのだ。しかも賞味期限が切れたら、同じ本の在庫を抱えるのはスペースの無駄だから、抽選^{らいかんしゃ}で来館者にあげてしまうという。

リクエストがある、予約待ちが長くなりすぎる。確かにいい分はあるだろう。でも、これがみんなの税金で支える図書館の理想的サービスなのだろうか。

問い：この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1. 図書館の予約待ちが長くなりすぎているという今の状況を改善するべきだ
2. 学生時代から利用している図書館の理想的サービスに対し、深く感謝している
3. 図書館のサービスは、ベストセラーの本を何冊も購入することではないはずだ
4. 図書館に何冊もある本を抽選で来館者にあげるとするのは、いいサービスである

問題 20 :

「食べるために働く」という言葉があります。人が生存していくには、やはりお金がかかるのであり、お金を得るためには、やはり働かなくてはなりません。いまはさらに「働き甲斐^{がい}」や「夢の実現」などが働くことの大きなファクター #1」になっていますから、仕事があって、それが自分のやりたいことと一致していれば、言うことはないわけです。

でも、現実にはなかなかそうもいなくて、目の前にあるのは希望とはまったく違うものだけれども、転職するのもたいへんだから、いやいや会社に通っているという人も多いでしょう。子供がいる人などはなおさら自分勝手^{じぶんがって}まともできず、毎日が我慢の連続かもしれせん。ときには「お金さえあったら好きなことができるのに」「誰かオレを養ってくれないかな」という気持ちになることもあるのではないのでしょうか。

ときどき「もし宝くじ^{たから}で三億円が当たったら、仕事をやめて遊んで暮らす」という言葉を聞くことがあります。たしかに、お金さえあれば働かなくていいような気がします。しかしーと、そこで私は考えるのです。もしお金があったら、人は本当に働くのをやめるのでしょうか。案外、そうでもないのではないのでしょうか。

問：この文章で筆者が最も言いたいことは何か。

1. 人が働くのは収入を得るためだが、お金があっても、働き続けるだろう
2. 人はやむを得ない理由で働いており、お金がたくさんあったら働かないだろう
3. 子供がいる人は、金持ちになったとしても、子供のために働くのをやめない
4. 人はお金のために働くのであり、お金があれば自分の夢を実現しようとする